第 8 回目（1993 年 11 月 27 日放送）

【いろはがるた】

「旅は道連れ、世は情け」：No road is long with good company.

【話の内容】

「社会がるた」、すなわち日本の格言として、「話し上手は聞き上手」「人のうわさも 75 日」「年寄りのくり言葉」「長生きしたくば嘘言うな」「真の言葉に飾りなし、飾り言葉に真なし」「年寄りの言葉に真理あり」「醜きは人を貶して笑う口」「八十の手習い」などの意味を説明した。

KZOO の別番組の放送も聞いているが、先日の宗教家の話に感銘を受けた。宗教とはメンバーじゃない人をメンバーに入れるものだが、最近はあたかも「〇〇教会株式会社」のように、宗教はメンバー以外には閉ざされている存在になっている。昔はヌアヌキリスト教会 [1]に、コミュニティーリーダーであるハワイ報知の寺崎定助、タハラ医師、渡邊次郎らがいき、受け入れられていた。

移民当初も人々はお寺に行っていたが、移民当初のお寺は宗派のお寺ではなく、各宗派が集まって在留同胞のお寺として一緒にお寺を建てた。苦しい移民初期の時代には、物質的なものより精神的なものの方が重要であり、宗教や宗教リーダーの存在はとても大きかった。今村監督（浄土真宗本願寺派の今村恵猛総長）も人々に慕われて、皆から「総長」ではなく、「監督」と呼ばれた。新聞記者として聞き取りに行っている時でも、今村夫妻（妻は清子）はとてもよくしてくれた。

昔の新聞記者というものは、電車にも乗らず歩いて情報を集めて回ったものである。豊平良金(豊平走川：「日布時事」の記者)らも電車賃を節約するために足で記事を稼いだ。新聞どうしの喧嘩が多く、当時の日記帳に「『ハワイ報知』と『日布時事』の関係は、イヌが西向きゃ尾は東」と書いていた。今と違って投票権がなかった当時、日系人は自分の思想などを学校やお寺、県人会などでぶつけ合っていた。けんかをする新聞が、いい新聞としてよく読まれた。山村火山（山村幸八）という人の「火山新聞」は、一番の「けんか新聞」であり、そのような新聞の多くが資料館にある。一つよりも、競争相手があった方がいいものになると言えるが、当時の新聞は、同胞の権利を守るためにあった。「ヒロタイムス [2]」は、1 世の幕引き新聞であり、1 世がいなくなったのを機に、大久保は 36 年間の新聞記者の仕事も終わった。

【曲】

---

[1] ヌアヌキリスト教会のウェブサイトでは当時の様子が確認できる。http://nuuanu.org/

[2] 1955 年に大久保が創刊した新聞。

「乙女の門出」

【サブジェクトタグ】

宗教　1世　今村恵猛　ハワイ報知　日布時事　新聞記者